

美里町文化財調査報告書第3集

小沼遺跡

平成19年3月

宮城県美里町教育委員会

小 沼 遺 跡

序 文

美里町は平成18年1月1日、宮城県北東部に位置する遠田郡内の小牛田町・南郷町の2町が合併して誕生した自治体です。町内には豊かな自然のなか、国指定史跡「山前遺跡」、町指定民俗文化財「関根神楽」などをはじめとした歴史遺産が数多く存在し、大切に守り伝えられてきました。これら文化遺産は町民はもとより国民共有の貴重な国民的財産であり、次世代に継承していくことが今に生きる我々の重大な責務であります。また保存とともに積極的に公開・活用を行うことが求められています。

しかし一方では、大規模な土地地区画整理や、個人住宅建設などの各種開発事業が年を追うごとに激化しており、特に埋蔵文化財は土地との結びつきが強いことから、破壊・消滅の危機に晒されることが多くなってきております。

本書は、県営ほ場整備事業【扭い手育成型】出来川右岸地区における暗渠排水設備工事に先だって平成18年に実施した小沼遺跡の確認調査の成果をまとめたものです。これらの成果が、地域の歴史的解明と文化財保護思想の高揚のために活用され、地域の歴史の解明に資するところとなれば大きな喜びであります。また一つの町として、新町誕生より1年以上が過ぎ、地域住民の方々の一体化を目指していく上で、身近な地域の個性豊かな風土や歴史的背景を共通のものとして捉え、各地域に散在する文化財の保護や活用の取り組みを推進していく上での一助となれば幸いです。

このたびの調査にあたりまして、職員の派遣等、絶大なるご指導、ご支援を頂きました宮城県教育庁文化財保護課、遺跡の保存にご理解を示され調査に際しまして多大なご協力を頂いた大崎地方振興事務所と地域の皆様、そして現地で調査作業に当たられた皆様に慎んで敬意を表するとともに、今後も皆様のご指導、ご協力を賜りますことをお願いする次第であります。

平成19年3月

美里町教育委員会
教育長 宮 鳴 健

例　　言

1. 本書は、宮城県大崎地方振興事務所との協議に基づき実施した、出米川右岸地区は場整備事業（暗渠排水工事）に伴う小沼遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は美里町教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が協力した。
3. 本書の第1図は国土交通省国土地理院発行の「小牛田」(1/25,000)の地形図を複製して使用した。
4. 測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。なお、方位は座標北を表している。
5. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

S I : 竪穴住居跡	S B : 挖立柱建物跡	S D : 溝跡	S E : 井戸跡	S K : 土壙
S T : 水田跡	S F : 畦畔			
6. 本書で使用した遺構番号は、調査区の番号と遺構略号を組み合わせたもので、番号は遺構の種別に関わらず、調査区毎に付した通し番号を用いている。
7. 土色の記載にあたっては、「新版 標準土色帖 1994年度版」(小山・竹原:1994)を使用した。
8. 本書は調査担当者との協議の後に、執筆・編集を宮城県教育委員会文化財保護課の菊地逸夫が行った。
9. 発掘調査の記録や出土遺物は、美里町教育委員会が保管している。

調　　査　要　項

遺跡名：小沼遺跡（こぬまいせき）（宮城県遺跡地名表登載番号：39033）

遺跡記号：TN

所在地：宮城県遠田郡美里町字小沼・勘堂・二ツ塙

調査主体：美里町教育委員会

調査担当：美里町教育委員会・宮城県教育庁文化財保護課

調査期間：平成18年12月4日～12月13日

調査面積：約1700m²

調査員：菊地逸夫 佐藤貴志（宮城県文化財保護課） 岩渕竜也（美里町教育委員会）

調査協力：宮城県大崎地方振興事務所

目　　次

序文・例言

I.はじめに	1
II.調査に至る経緯	2
III.調査の方法	2
IV.調査の成果	2
V.まとめ	9

Iはじめに（第1図）

小沼遺跡は宮城県遠田郡美里町字小沼・勘堂・二ツ塙に所在し、JR東北本線小牛田駅から東南東約2.5kmの位置にある。

周辺の地形を概観すると、遺跡の東西で様相は大きく異なり、西側は不動堂・彌堂・鶴頭山・皎善寺などいくつかの低丘陵や独立丘陵が点在して台地状を呈するが、東側は沖積地が広がる低地帯となっている。遺跡は鳴瀬川左岸にある東西に延びる二本の自然堤防の中の北側の自然堤防上にあり、低湿地をへだてた南側には一本柳遺跡が所在している。この付近の鳴瀬川は、遺跡の対岸の八軒地区周辺に旧河道の名残である「三日月湖」の痕跡が確認されるなど、蛇行しながら流路を変えて流れていたものと推定され、小沼遺跡と一本柳遺跡間の低地部分もかつては河道であった可能性がある。

鳴瀬川左岸の自然堤防上には、一本柳遺跡をはじめ大崎市舟場遺跡、同町安藤前遺跡など古代から中世の遺跡が数多く存在し、この付近が古くから生活の舞台として利用されていたと考えられる。

小沼遺跡は、北側に張り出した弧形を呈する自然堤防上のほぼ全域にあたり、範囲は東西約850m、南北約250mである。遺跡の全域を対象とした調査は行われていないが、西端部で町道建設工事に伴う事前調査が行われ、古代および中世の掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土壙とともに土師器、須恵器や中世陶器が発見されている（宮教委：2000、2001、2002）。遺跡の現状は西半は宅地、畠地として、東半は水田として利用されている。

一本柳遺跡は堤防改修や県道・町道の改修、ほ場整備事業などにより大規模な発掘調査が行われ、奈良・平安時代には掘立柱建物が規則的・継続的に配置された官衙的集落であったこと、中世には在地領主クラスの武士の屋敷跡であったことがわかっている。また、一本柳遺跡と小沼遺跡の間の低地からは灰白色火山灰がのる古代の水田跡が検出されている（宮教委：1998、2000、2001、2002）。



第1図 小沼遺跡と周辺の遺跡

II. 調査に至る経緯

本遺跡周辺は、平成13年までには場整備事業により田面および用排水路の工事が完了している地区であるが、土地利用者から暗渠排水の設置を要望する声が高まり、同事業最終年度の今年度事業として暗渠排水工事が計画されたものである。

こうしたことから宮城県古川地方振興事務所（平成18年4月1日より宮城県大崎地方振興事務所に名称変更）、美里町教育委員会生涯学習課文化財係、宮城県教育庁文化財保護課の3者は、当該地区における暗渠排水工事計画と当遺跡との係わりについて事前協議を行い、稲刈り後に確認調査が必要であり、遺構に影響の無い工法変更も含めた再検討を要望し協議書の提出を求めた。

古川地方振興事務所は平成18年1月17日付でこのことに対する協議書を提出し、宮城県教育委員会より平成18年2月2日付で当該地に対する遺構確認調査が必要であるとの回答がなされた。これを受けて暗渠排水の性格上、掘削は免れることから、大崎地方振興事務所により平成18年8月3日付で発掘通知が提出された。

その後、平成18年11月20日に土地利用者向け説明会を実施し、現地調査の主体者・期間・調査目的と対象地等について最終確認がなされ、平成18年12月4日～12月13日にかけて確認調査を行った。

III 調査の方法

暗渠排水の工事が施工される遺跡の東側部分と周辺の遺跡隣接地を対象に、遺構の分布や内容の把握、遺構確認面までの深さを確認することを主眼とし、これらを達成するため対象地区内に南北方向、東西方向のトレンチを合計14本設定した。

調査は、重機によりI・II層を除去し中世以降の遺構がないことを確認した後に、さらにV層上面まで掘り下げ、ケズリによる遺構確認作業を行った。

調査区の位置や検出された遺構についての図面類は平板によって1/200の平面図を作成し、各調査区の状況や遺構については必要に応じてデジタルカメラおよび35mmカメラにより写真撮影（白黒）を行った。遺構の掘り下げや断ち割りは行っていない。

IV 調査の成果

[基本層位]

I層 灰褐色のシルトで現在の耕作土である。厚さは15～20cmである。

II層 灰褐色の粘土質シルトで区画整理以前の水田の耕作土と考えられる。T6以東の調査区に認められ、東に向かって厚さを増す。厚さは最も厚いT13付近で約20cmある。

III層 黒褐色のシルトで区画整理事業により削平を受けていない標高の低い部分（旧河道に近い部分）に分布し、T1・T2の南側部分やT11以東に顕著にみられる。厚さは数cm程度である。中世の遺構面である。

IV層 灰白色火山灰で、III層同様標高の低い部分で面的に分布する。また、一部では耕作などによりV層にすき込まれた状態で斑状に検出された。厚さは最も厚いT11・T13付近で約5cmある。

第2図 調査区の位置



V層 黄褐色のシルトもしくは粘土質のシルトですべての調査区で検出されている。灰白色火山灰層以前の堆積層で、近接する・本柳遺跡では同一と思われる層から古代の遺構が検出されている。この層の上面で遺構の検出作業を行っている。

[調査区の概要]

○T1区（第2図）

遺跡の南側への延びを確認する目的で設定した調査区で、遺跡の隣接地にあたる。幅4m、長さ27mの南北に長い調査区である。調査区の北側では耕作土直下約20cmでV層が表れるが、中ほどから南側ではⅢ、IV層が表れ、南に向かって厚さを増す。遺構・遺物は検出されなかった。

○T2区（第2図）

T1区の東側35mの地点に位置し、幅4m、長さ30mあり南北に長い。T1区と同様に遺跡の南側への延びを確認する目的で設定した。南端でⅢ層の薄い堆積を確認したが、それ以外では耕作土直下約20cmでV層が表れる。遺構・遺物は検出されなかった。

○T3区（第2図）

T2区の東側15mの地点に位置する。T2区までの範囲で遺跡の南側への延びが全くみられないことから、遺跡南縁部の遺構の有無を確認する目的で設定した。幅4m、長さ34mの東西に長い調査区である。耕作土直下約20cmでV層が表れた。遺構・遺物は検出されなかった。

○T4区（第2図）

T3区の東側15mの地点に位置し、T3区と同様に遺跡南縁部の遺構の有無を確認する目的で設定した。幅4m、長さ32mの東西に長い調査区である。西端では耕作土直下約20cmで、東側では30～35cmでV層が表れた。遺構・遺物は検出されなかった。

○T5区（第2図）

T4区の東側18mの地点に位置し、幅4m、長さ28mあり東西に長い。耕作土直下約30cmでV層が表れた。遺構・遺物は検出されなかった。

○T6区（第2図）

T5区の東側65mの地点に位置し、幅4m、長さ55mあり東西に長い。耕作土直下約25cmでV層が表れた。遺構は検出されなかつたが、調査区の西端付近でV層に食い込む状態で瀬戸産の瓶子が1点（第6図1）出土している。

瓶子は肩部の破片で、肩下に3本単位の圈線が巡り、淡緑色の釉が施されている。こうした特徴をもつ瓶子は、古瀬戸編年（藤沢：1996）の後二期から後IV頭にみられるものであり、小片のため全体的な器形は不明で時期を限定することはできないが、大きく15世紀前半頃のものと考えられている。

○T7区（第3・6図）

T6区の東側15m、南側10mの地点に位置し、幅4m、長さ40mあり東西に長い。耕作土直下約20cmでⅡ層が表われ、その下約10cmでV層が表れた。溝跡3条、畦畔1条、水田1面が検出された。重複関係からT7SD1→T7SD2→T7ST3・T7SF4・T7SD5（一体のもの）と変遷する。T7SD1は堆積土上面に灰白色火山灰が分布しており古代以前のものと考えられる。耕作土中やV層上面から土師器・須

恵器・中世陶器・近世陶磁器が出土している。2・3はいずれも壺の体部破片で2には正格子の押印が施されている。常滑産と考えられる。4は皿の底部破片で、三角の削り出しの高台が付く。見込みの部分に青呉須による絵付けがあるが小片のため意匠は不明である。全体に長石釉が施されている。

産地については不明であるが、近世以降のものと考えられる。

○T8区（第2・6図）

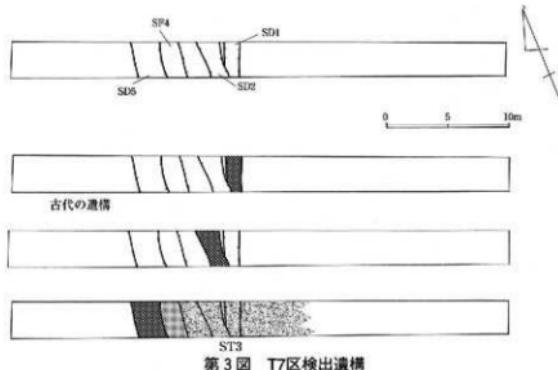
T7区の東端部から南側に延ばした調査区で、幅4m、長さ63mある。北側では耕作土下約20cmでⅡ層が表われその下約10cmでV層が、南側では耕作土直下約20cmでV層が表れた。遺構は検出されなかつたが、小型の擂鉢（第6図5）が出土している。器高が7cm程度で、製作にロクロを使用しており、口唇部のみシャープに仕上げられている。筋目は施されていない。胎土は全体的に長石や石英の粒が目立ち、色調は赤褐色を呈している。在地産と考えられる。

○T9区（第4・6図）

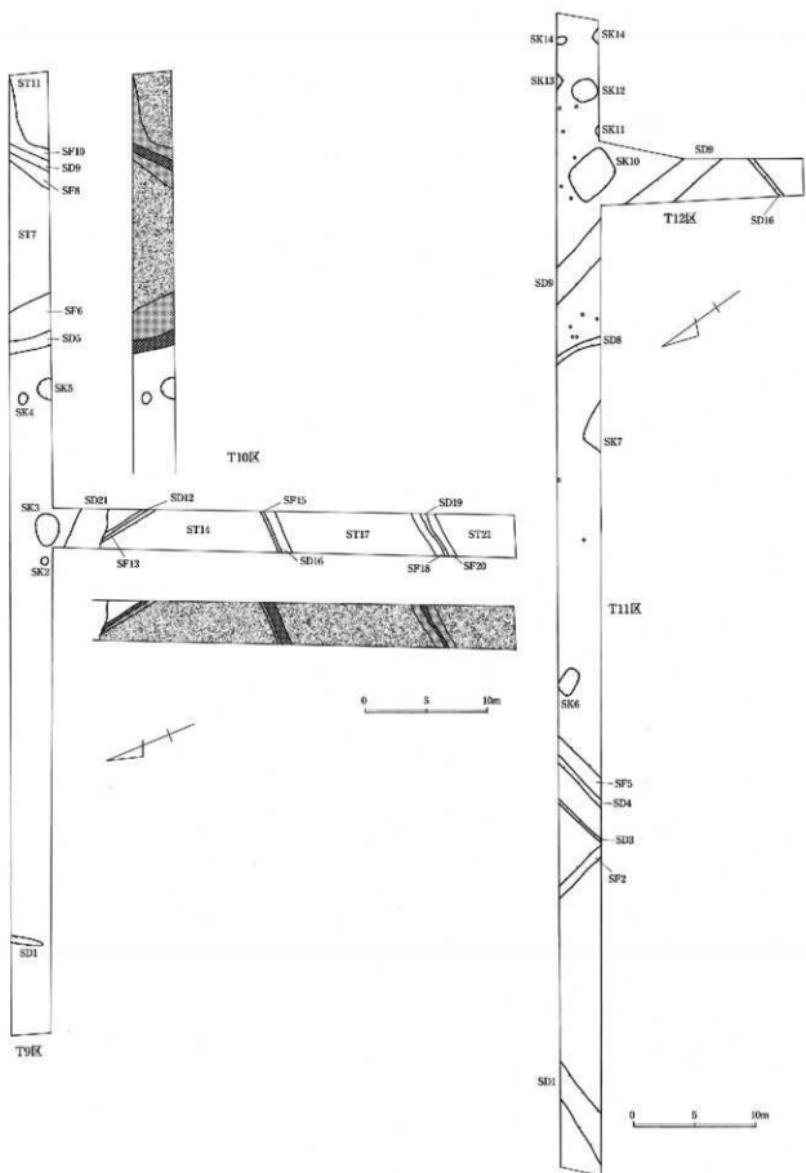
T7区の東側50m、南側20mに位置する。幅4m、長さ79mの東西に長い調査区である。

西半と東端では耕作土下約20cmでⅡ層が表われ、その下約10cmでV層に達したが、中央は耕作土直下約20cmでV層に達した。検出された遺構には西側で溝1条、中央部で土壤4基、東側で水田跡2面とそれに伴う畦畔3条と溝跡2条がある。この中でT9SD1は周囲には場整備以前の水田の耕作土であるⅡ層が分布することから近代以降のものであり、東側で検出された水田跡は耕作土および畦畔上に灰白色火山灰が堆積していることから古代のものと考えられる。

遺物には耕作土中やV層上面から出土した土師器・須恵器・中世陶器がある。図示できたものは須恵器と中世陶器である。6・7・9・10は須恵器坏で、9・10は底部、6・7は口縁部の破片である。9は回転ヘラ切り、10は回転糸切りによるものである。底部が比較的小さいものであり、9世紀後半以降のものと考えられる。8は高台坏で比較的高い高台が付けられている。11は擂鉢の体部破片で内外面にシャープにロクロ目が残り、外部下端に回転ケズリが加えられている。筋目は施されていない。瀬戸産の可能性がある。12~14は壺の体部破片で、12には目の細かい正格子の押印が施されている。いずれも常滑産と考えられる。15は壺の口縁部の破片で、受け口状を呈している。口縁端部は比較的厚く作られており、在地産と考えられる。伊豆沼産の可能性があり、13~14世紀のものと考えられる。



第3図 T7区検出遺構



第4図 T9~T12区検出構造

○T10区（第4図）

T9区の中央から南側に延びた南北に長い調査区である。幅4m、長さ38mである。北端では耕作土下約20cmで、南端では約40cmでV層に達し、南半ではⅢ・Ⅳ層が薄く堆積する。灰白色火山灰をすき込んだ水田跡が3面（T10ST14・17・21）確認された。T10SD12・16・19とT10SF13・15・18・20はそれぞれこれらの水田に伴う溝跡や畦畔である。遺物には土師器・須恵器・中世陶器・近世陶磁器があるが、いずれも小片で磨滅したものが多く図示できるものはない。

○T11区（第4・6図）

T10区の東側20m、北側20mに位置する。幅4m、長さ95mの東西に長い調査区である。

耕作土下約30cmでV層に達し、SF5以西ではほ場整備以前の水田の耕作土であるⅡ層の分布がみられた（ST18）。

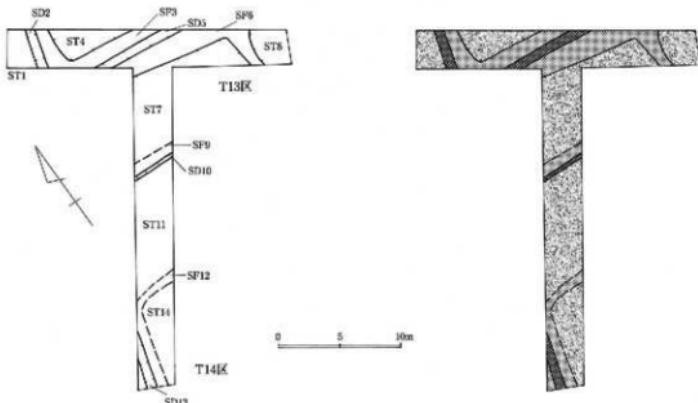
検出された遺構には溝跡6条、畦畔2条、土壙9基（豊穴住居跡の可能性のあるもの3基含む）と円形の小ピット多数がある。土壙には円形を基調として直径が1m以内に収まる小型のものと、方形を基調として規模の大きなもの（T11SK7・10・14）があり、後者は豊穴住居跡の可能性がある。T11SD4・16は堆積土中に灰白色火山灰を含んでおり古代のものと考えられるが、それ以外の畦畔や溝跡は堆積土の特徴から近世以降のものと推定される。

遺物には土師器・須恵器・赤焼土器・中世陶器・近世陶磁器があり、図示できたのは須恵器と中世陶器である。16・17は須恵器壺で、17は回転糸切りによるものである。18は中世陶器の壺の部体破片で、常滑産と考えられる。古代の遺物には、図示したものに他に非ロクロの土師器壺や赤焼土器がある。

○T12区（第4図）

T11区の東端近くから南側に延びた南北に長い調査区である。幅4m、長さ17mである。耕作土直下25cm～40cmでV層に達した。T12SD16とT12SD9に挟まれた部分からV層にすき込まれた状態で水田耕作土の分布が認められたが、Ⅱ層と同質のものであり、近世以降の水田跡と考えられる。

耕作土およびV層上面から土師器・須恵器・中世陶器（常滑産の壺）の小片が出上している。

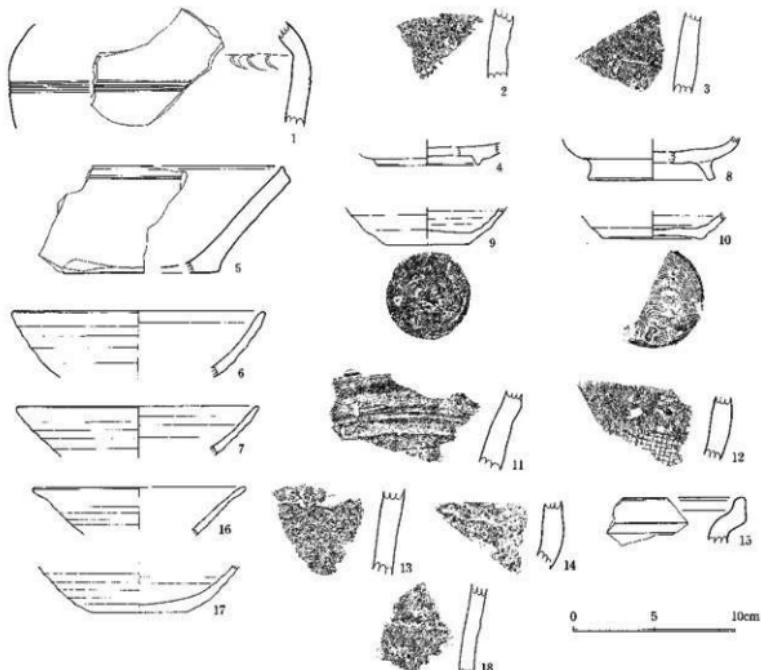


第5図 T13・14検出遺構

○T13区（第5図）

T11区の東側約20mに位置する。幅4m、長さ23mの東西に長い調査区である。

西端では、耕作土下約15cmでⅡ層に、さらに25cmでⅤ層に達するが、調査区の中央付近から東側ではⅢ・Ⅳ層が表れ、東端ではそれぞれ5cmの厚さがある。Ⅲ・Ⅴ層は東に向かって徐々に厚みを増すもので、地形的にもこの部分から比較的急に傾斜するものと考えられる。



番号	地区	層位	種類	器種	層位	地質	備考
1.	T6	1	灰褐色砂	板子	裏面?	体部	赤褐色の灰結 層下に3本単位の附着 止格子の押印
2.	T7	1	中世陶器	壺	泥漬	体部	
3.	T7	1	中世陶器	壺	泥漬	体部	
4.	T7	1	近世陶器	皿	不明	底足	延込み具足で給付け
5.	T8	1	中世陶器	罐	生地	口縁	筋目なし
6.	T9	1	武士塚	环	山礫層		
7.	T9	1	灰褐色砂	所	山礫層		
8.	T9	1	灰褐色砂	高台坪		体部	
9.	T9	1	灰褐色砂	环		体部	筒輪ヘテリケヅリ
10.	T9	1	灰褐色砂	环		体部	筒輪系切り
11.	T9	1	中世陶器	罐	裏面?	体部下端	ワクロ使用 体部下端46紙ヘフケヅリ
12.	T9	1	中世陶器	壺	裏面	体部	正格子の押印
13.	T9	1	中世陶器	壺	泥漬	体部	
14.	T9	1	中世陶器	壺	泥漬	体部	
15.	T9	1	中世陶器	壺	生地	口縁部	口縁部の凹陥部 伊豆泥?
16.	T11	1	灰褐色砂	环		口縁部	
17.	T11	1	灰褐色砂	壺		体部	筒輪系切り
18.	T11	1	中世陶器	壺	生地	体部	

第6図 出土遺物

検出された遺構には灰白色火山灰に覆われた水田跡4面とそれらに伴う溝跡（水路）や畦畔がある。調査区の中央で検出されたT13SD5は両側に畦畔（T13SF3・6）を伴っており、同様の構造をもつ水路跡はT13区から約70m南側に位置する一本柳遺跡I-4・5区でも検出されている。（官教委：2001）

I・II層中から上師器や須恵器の小片が出土している。

○T14区（第5図）

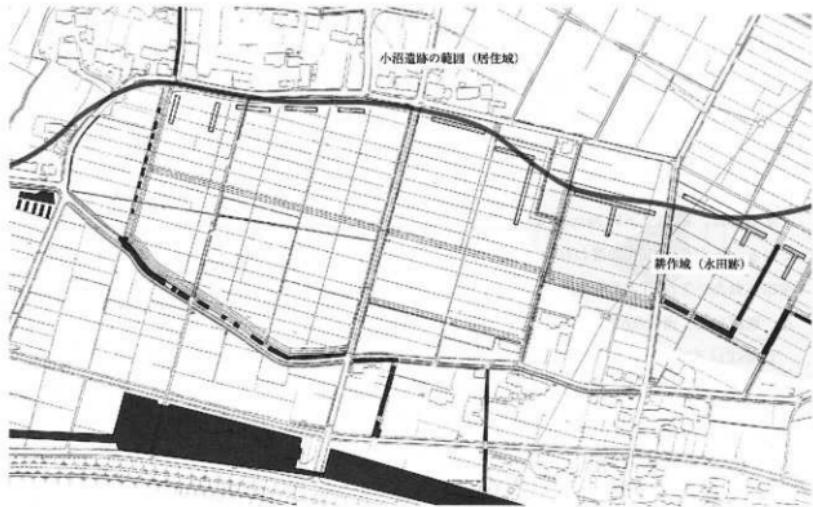
T13区の中央から南側に延びた南北に長い調査区である。幅4m、長さ27mである。

北端では、耕作土下約20cmでII層に、さらに25cmでV層に達するが、南端では薄くIV層が堆積している。灰白色火山灰に覆われた2面の水田跡（T14ST11・14）とそれに伴う溝跡（水路）や畦畔が検出された。T14ST7は西側部分が調査区外へと延びるが、この部分の水路や畦畔の位置を推定すると、東西15m、南北6mで約90mの広さがあったと推定される。

T14ST11・14の耕作土中から土師器や須恵器の小片が出土している。

V まとめ

1. 本調査は、暗渠排水工事に先立って行われた遺構確認調査であり、工事対象地での遺構の分布や内容の把握、遺構確認面までの深さを確認することを目的とした。
2. T6以西の調査区では遺構は一切確認されず、遺物もほとんど出土していない。
3. 東側では、T9区で土壤4基が、T11区では土壤9基が、これらの南側のT10区やT12区とさらに東側のT13・14区では水田跡が検出されている。水田跡の規模のわかるものはT14ST7のみで、規模は東西15m、南北6mで約90mの広さがある。
4. 遺跡の範囲はこれまで考えられていた境界とはほぼ同じであるが、自然堤防の高まりは現在の小沼の集落よりも約300m東側の水田地帯まで広がることがわかった。
5. 遺跡は東西に延びる鳴瀬川左岸に形成された自然堤防に立地しており、その南側は旧河道となっている。遺跡の周辺は、ほ場整備事業等により全体的に標高差はみられないが、旧地形は旧河道に向かって急激に下がっていることが分かった。遺跡は自然堤防上に居住域が、その周囲（特に南東部）に耕作域（水田）が広がっていたものと考えられる。（第7図）
6. 出土遺物には古代の遺物（8世紀頃から10世紀頃までの土師器・須恵器）や中世陶器（13～14世紀の在地産の壺や15世紀前半の瀬戸産の瓶子など）があり、この付近一帯が長い間生活の舞台として利用されていたと考えられる。



第7図 遺跡の概要

引用・参考文献

- 藤澤良祐 (1996) : 「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』
瀬戸市埋蔵文化財センター設立5周年シンポジウム資料集
- 宮城県教育委員会 (1998) : 「一本桟遺跡Ⅰ」宮城県教育委員会文化財調査報告書第178集
- 宮城県教育委員会 (2001) : 「一本桟遺跡Ⅱ」宮城県教育委員会文化財調査報告書第185集
- 宮城県教育委員会 (2000) : 「一本桟遺跡・小沼遺跡」『名生館遺跡ほか』
宮城県教育委員会文化財調査報告書第183集
- 宮城県教育委員会 (2001) : 「一本桟遺跡・小沼遺跡」『名生館遺跡ほか』
宮城県教育委員会文化財調査報告書第187集
- 宮城県教育委員会 (2002) : 「一本桟遺跡・小沼遺跡」『名生館遺跡ほか』
宮城県教育委員会文化財調査報告書第188集

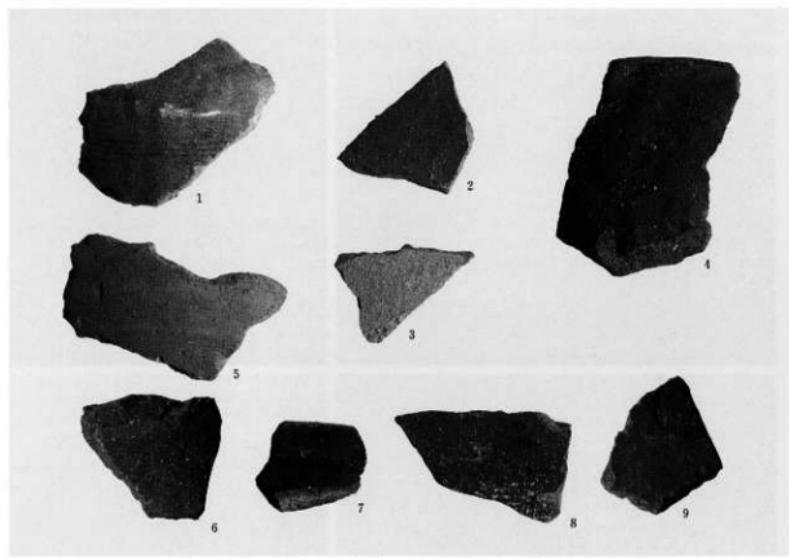


上：遺跡遠景（南から） 下：遺跡東部（南から）



図版 3





1 6図1	2 6図3	3 6図2	4 6図5	5 6図11	6 6図13
7 6図15	8 6図12	9 6図18			

報告書抄録

ふりがな	こぬまいせき							
書名	小沼遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	美里町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	菊地逸夫 岩渕竜也							
編集機関	美里町教育委員会							
所在地	〒987-8602 宮城県遠田郡美里町北浦字駒米13 TEL0229-32-2378							
発行年月日	西暦2007年3月26日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	市町村	遺跡番号	コード	世界測地系	調査期間	調査面積	調査原因
					北緯 東経			
小沼遺跡	宮城県遠田郡 美里町字 小沼・勘堂・ 二ツ木	045055	39033	38° 31' 26"	140° 05' 42"	2007.12.4~12.13	約 1700m ²	は場整備事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小沼遺跡	散布地	古代・中世	溝跡・土壙・ 堅穴住居跡・ 水田跡	上層器・須恵器・ 中世陶器・近世陶器				

美里町文化財調査報告書第3集

小 沼 遺 跡

平成19年3月19日印刷

平成19年3月26日発行

発行 美里町教育委員会
宮城県遠田郡美里町北浦字駒木13

印刷 株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24-24

